

# ゴマスリ職制を粉砕し 運転保安を確立しよう

## 日刊 勤労千葉

87. 8. 13

No. 2627

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）  
（鉄電二九三五六・公衆〇四七二（22）七二〇七）

### 運転保安まで労働者差別に悪用する

### 千葉運行部一部幹部を許すな（そのI）

いま、全国のJR職場で事故が多発している。国労東京等の指摘に対し動労革マルは「事故は少なくなった」と駅頭ビラ配布などをしてしている。その動労組合員が「三月三十一日までは重箱のスキを突つつくようなことまでして事故を『多発』させ、四月一日以降は『事故かくし』をやっているんだからいいかげんなものさ」と自嘲しているのが現実である。

千葉でも「事故」が多発している。斉藤次長等は「非常事態」を宣言し、責任を現場労働者に押しつけ、職制も含めた相互監視、タレ込み、スパイ強要の恐怖政治を一層強化しようとしている。おカド違いである。改めるべきは斉藤次長等の姿勢である。運転保安問題までを労働者差別に悪用する斉藤次長等、千葉運行部一部悪質幹部の蛮行を許さず、スト権一票投票を成功させ闘いぬこうではないか。

### ゴマスリ行方の蛮行

八月十一日、勝浦で、二三三M列車の乗継時に、運転室の遮光幕を閉めた乗務員に対し、鶴原駅までの添乗のために居合わせた運行部の行方（車務課員で社員労・副委員長）が「カーテン開けろ」と強要する事態が発生した。

これに対し当該乗務員が「勝浦からトンネル区間であり、遮光幕は閉めることになっている」と主張したことに対し、行方は、「そんな規程は最初からない」と言い切ったのである。そして運転中であるにもかかわらず「添乗報告のやり方がまづい」等々、毒づきながら鶴原駅で下車していったのである。

われわれは、JR東日本千葉運行部車務課にして社員労である行方のこの蛮行を絶対に許さない。この行方は、日頃、駅の柱のカゲで乗務員を監視して遮光幕、ネクタイ、名札、ネクタイピンなどの状況を確認したり、友達面して乗務員室へ乗り込み、私的なおしゃべりをしていて後で「〇〇列車の乗務員は信号喚呼をしなかった」などと所属区へ文句を言ったりすることをもっぱらとする卑劣漢である。

### 「千葉運行部一部幹部は事故を起こさせようとしているのだ」

このような陰險なスパイ政治、タレコミ政策の中でいま、千葉の運転職場では「斉藤次長等は何とか千葉で事故を起こさせようとしているのだ」

という不信が充満している。

かつて動労千葉組合員であった頃、連日マージヤンに明け暮れし、電話による突発休の常習者であり、周囲から「国鉄が正常なら当直助役にもなれない男」と言われている行方などのゴマスリ分子を悪用し、「事故を多発させることを通して千葉の運転職場を動労革マル松崎に売り渡そうとする陰謀だ」などと職場で言われている斉藤次長等一部幹部は姿勢を改めるべきである。

### 労働者は闘わなければ生きられない

列車安全は、列車の前頭を守る機関士・運転士が前方注視に専念することが大前提である。そして、乗務員に対しては「人が見ていようが見ていまいが」いつも同じように冷静に仕事をするのが求められる。国鉄は、百年余の歴史を通して「運転席に座ったらその列車の運転に関する全責任と権限は乗務員にある」ということを確立してきたのである。

乗務員に限らず国鉄は、それぞれの仕事を熟知する現場の第一線の労働者の判断を尊重することによって安全を確保してきたのである。

そういう一切を破壊し「人が見ている」時だけ「やったふりをする」ゴマスリを重要視し、安全を確保する立場からの正当な意見や主張を「意識改革ができていない」と切り捨て、処分までしてきたのが斉藤等千葉運行部である。

駅の柱のカゲで監視し、私服のまま運転中の乗務員室へ入り込んでイチャモンをつけて乗務員

17日 スト権一票投票スタート  
100%確立し反撃しよう！

21日 「俺たちは鉄路に生きる」  
第三報一  
封切り上映会  
市民会館  
18時から